

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 11 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370047

研究課題名(和文)江戸時代における陽明学資料の流入およびその影響について

研究課題名(英文)The introduction and influence of Yangming xue in Edo period

研究代表者

永富 青地(Nagatomi, Seiji)

早稲田大学・理工学術院・教授

研究者番号：50329116

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間中において、「『鄒守益集』未収詩輯佚;内閣文庫蔵『鄒東廓先生詩集』より」(一～三)においては、江戸時代に日本に流入した『鄒東廓先生詩集』によって、中国で刊行された『鄒守益集』に収められていない詩を十万字余り翻刻したことは、学界において高く評価され、『鄒守益集』の改訂版においては、永富の成果が収録されることが決定している。

また、論文「佐藤一斎是否一個朱子学者—從『欄外書』中の記載談起」においては、佐藤一斎が、中国から輸入された陽明学資料を基に、いかにして陽明学を理解し、陽明学の信奉者となっていったかを実証的に解明し、中日韓三国の学者に対してそれを示すことができた。

研究成果の概要(英文)：In this period, in "The Poem of Zou Shouyi In the Zou Dongguo Xiansheng Shiji" (1,2,3), I reprinted the poetry which flowed into Japan in the Edo era. The book contains more than 100,000 characters unknown poems, and it is decided that the revised edition of "鄒守益集" contain my reprint.

In addition, in the article "佐藤一斎是否一個朱子学者—從『欄外書』中の記載談起" I described that Issai Sato how understood the doctrines of Wang Yang-ming based on the document introduced by China and how he can believe the doctrines of Wang Yang-ming, and I am able to show it for the scholar of China, Japan and Korea three countries.

研究分野：中国思想

キーワード：陽明学 佐藤一斎 日本陽明学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 前近代において、王守仁(王陽明)の著作は、王守仁自身の記した真筆も含めて日本に多数渡来してきた。特に、王守仁の『大学解釈』が、江戸時代の思想界に大きな波紋を投げかけたことは有名である。また、王守仁の人物やその文学、書道、政治、軍事などにおける功績も儒学者たちの関心を呼びおこしており、例えば、斎藤拙堂は、必ずしも陽明学者とは呼べないが、王守仁の書を称讃する見解を、『拙堂文話』において述べているのである。このように、王守仁の著作は、陽明学者の枠を超えた、より広い儒者層、さらには文人たちによっても受容がなされていたのであり、そしてそれらは、日本の思想・文芸に対し、長期に渡り、多大な影響を与えてきたのである。

(2) 日本における陽明学に関しては、明治期の包括的な研究である井上哲治郎の

『日本陽明学派の研究』にはじまり、吉田公平氏の江戸期における『大学』解釈の諸問題に関する研究、宮城公子氏の大塩平八郎に関する研究、さらには近代における陽明学の受容に関する、小島毅『近代日本の陽明学』に至るまで、多くの研究がなされている。

(3) 日本における陽明学文献に関しては、従来部分的には研究がなされてきたものの、包括的な研究は今なおなされていない。そもそも江戸期においてどれだけの王守仁の著作が日本に渡来し、それらをもとにどれだけの和刻本が刊行されたのか、という江戸期における陽明学研究の基本的な調査すらなされてこなかったのが実情なのである。そのため、江戸期において、陽明学に対してさまざまな見解を有する儒学者たちが、どのような中国渡来の陽明学関係の文献、あるいは和刻本を用いて陽明学の研究、あるいは批判

を行っていたのかという、極めて基本的な問題に対する回答を、我々は有していないのである。

(4) 筆者は、このような問題に対して従来から関心を寄せており、江戸期における卓越した陽明学研究者である佐藤一斎が、『伝習録』の各種の版本や、『陽明先遺言生録』などの佚存書、さらには『大学古本傍釈』といった、中国から渡来したばかりの書籍までも利用して精緻な陽明学研究を進めていった様を、「佐藤一斎と『伝習録欄外書』 江戸期における陽明学の研究」(永富青地編『儒教 その可能性』[早稲田大学出版社、二〇一〇]所収)において解明した。本研究においては、そのような、江戸期の儒者たちが用いた原資料まで遡ることによって、彼らに与えた陽明学のインパクトを具体的に探る手法を、より広い範囲の学者達について行っていく所存である。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究においては、先ず日本国内の図書館・博物館などに所蔵されている王守仁の真筆の網羅的な調査を行い、その伝来の径路、今日までの所蔵者についても精査し、日本に現存する王守仁の書跡に関する総合的目録を作成していきたい。また、それらの王守仁の書跡の多くは、江戸時代の儒者によって鑑賞され、彼らの随筆の中には、それらを見た際の感想が多く記されている。そのような鑑賞の記録についても、総合的な調査を行っていく。これらの調査によって、江戸期において王守仁の書跡や彼の事績がどのような人々によって受容されてきたのかを具体的に解明できるのである。

(2) 次に、江戸期において、中国から流入した陽明学関係の文献がどのようなものであったのかを、長崎からの輸入の際の記録、書肆の販売目録、さらにはそれらの文献を購入した学者たちの文集・随筆などを通して精査していく。このような手法は、文学作品については以前より採用され、多くの成果を上げてきたが、陽明学の研究において採用されたことはなかった。本研究においては、このような調査を徹底的に行うことによって、従来の研究においては空白となっていた、陽明学の日本への流入の第一歩を探っていくこととする。

(3) 次に、それらの唐本に基づいて、どのような和刻本がどの書肆によって刊行され、その

出版過程において、どのような人物がかかわり、またどのように受容されていったのかを、現存する和刻本の序跋および書肆の出版記録、儒者や文人たちによる読書記録などから探っていきたい。江戸期における陽明学の受容は、多くの場合、和刻本によってなされてきたのにもかかわらず、陽明学関係の和刻本に関する総合的な調査がなされたことはない。筆者はこの点についても従来から関心を寄せ、「王守仁著作和刻本序跋」(永富青地『王守仁著作の文献学的研究』附録、汲古書院、二〇〇七)において、そのための基礎的作業に着手したが、その作業をより全面的かつ完全なものとしていきたい。特に、これらの和刻本がどのように受容されていったのかを知ることによって、江戸期における、必ずしも陽明学者に分類されない人々も含む知識人が、陽明学に対してどのような見解を有していたのかを解明していきたい。周知のごとく、近年、中野三敏氏は、江戸期の文芸に与えた陽明学の影響が大きかったことを力説され、大きな注目を浴びている、しかしながら、氏の研究においては、文人層における陽明学の受容の具体的な諸相に関する調査が不足していたため、氏の見解が学界のコンセンサスを得るには至っていない。本研究は、この江戸期の文芸に与えた陽明学の影響という、極めて大きな問題の解明にも役立つことが期待されるのである。

(4)また、これらの唐本、和刻本によって江戸期の儒者たちは陽明学理解を深め、江戸期の初期より明治に至るまで、多くの儒者が陽明学の教義を一般の読書人に対して宣伝、あるいは批判するためにさまざまな形で概説書を刊行してきた。これらの書籍は日本人の陽明学理解の最終段階に位置するものであるが、それらに関しては、陽明学研究者、あるいはその批判者から、その関心に応じてごく部分的に言及されるのみであり、陽明学関係の書物の中国版、あるいは和刻本に比しても、総合的な研究はさらに少なかったといわざるを得ない。本研究においては、それらの概説書の包括的な目録を作成するとともに、それらの概説書の作者たちが、陽明学からどのような影響を受け、そして陽明学をどのように咀嚼したのかという、それらの書物の内容にまで踏み込んだ分析を行っていきたい。

(5)以上の研究によって、王守仁の著作が中国よりどのようにして日本にもたらされ、また、日本においてどのような形で流布し、どのように受容され、さらに、儒者のみならず広く文人層に受け入れられていったという、その具体相の解明が期待される。このように、従来なおざりにされてきた文献学の観点によって、日本における陽明学の受容の実相を明らかにすることができる点において、本研究は大きな意義を有するものと思われるのである。

### 3. 研究の方法

(1)本研究においては、先ず日本国内の公私

収蔵機関に所蔵されている王守仁の書跡の網羅的な調査を行い、その全文をデジタルデータとして記録する。さらに、日本人によって記されたその題識跋語や収蔵印などから、その由来についても記録・考察を行う。

(2)次に、江戸期において、中国から流入した陽明学関係の文献について、長崎からの輸入の際の記録、各地の重要なコレクションの蔵書目録、さらにはそれらの陽明学の文献を閲読した人々の文集・随筆などを通して精査していく。次に、それらの唐本に基づいて出版された和刻本や儒者・文人たちの読書記録などの考察によって、和刻本の出版背景と具体的な出版過程などを探り、江戸時代における陽明学文献の受容の様子を究明する。

(3)最後に、これらの唐本、和刻本によって陽明学理解を深めていった江戸期の儒者たちが作成した、陽明学の教義を一般の読書人に対して宣伝、あるいは批判するための概説書の出版状況を考察し、併せてその内容の分析を行う。

(4)以上の考察・研究を通して、日本における陽明学資料の流入およびその影響についての具体的な過程を解明し、日本における陽明学の受容史を文献考察の角度から明らかにしていく。

### 4. 研究成果

(1)研究期間中において、「『鄒守益集』未収詩輯佚；内閣文庫蔵『鄒東廓先生詩集』より」(一～三)においては、江戸時代に日本に流入した『鄒東廓先生詩集』によって、中国で刊行された『鄒守益集』に収められていない詩を十万字余り翻刻したことは、中国本土の学界においても高く評価され、中国大陸における標準的な版本である、「陽明後学叢書」の『鄒守益集』の改訂版においては、永富の翻刻による成果が収録されることが決定している。

(2)また、論文「佐藤一斎是否一個朱子学者- 従『欄外書』中的記載談起」においては、佐藤一斎が、中国から輸入された陽明学資料を基に、いかにして陽明学を理解し、陽明学の信奉者となっていったかを実証的に解明し、中日韓三国の学者に対してそれを示すことができた。本論文は、佐藤一斎を、朱子学と陽明学の双方を折衷した、いわゆる折衷学者であったとする、日本を含む東アジアの学界に一石を投じるものとして、発表当時より大きな注目を浴びることとなった。

(3)2016年にソウル、成均館大学において行った口頭発表、「『聖跡図』在日本江戸時代的出版与伝播」は、中国から輸入された出版物が、日本においていかに受容、変容されるのか、という本研究の目的意識により、中国においては童蒙の書として、知識人からは全く相手にされてこなかった『聖跡図』が、日本においては、林羅山を含む、超一流の知識人たちによって受容、変容がなされたのかについて具体的に、書影をPDFで示しつつ行ったものであり、学界に参加した中

日韓三国の学者より、初めて知る内容として、好評を博した。本研究の内容が高い評価を得たことは、中国における文献学の最高水準を示す学会誌である、『版本目錄学研究』(国家図書館出版社)が、2017年度中における本論文の掲載を掲載を決定したことから明らかである。

(4)さらに、本研究中において得ることのできた、欧米の学会の研究動向に関する調査結果を利用して、編訳『中国書籍史のパーспекティブ-出版・流通への新しいアプローチ』(勉誠出版、2015)を刊行した。従来、この方面における欧米の学者の成果はほとんど知られていなかったため、近世思想・文化の研究者より、高い評価を得ることができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計12件)

石井道子・永富青地「『新編天主実録』訳注(一)」、『人文社会科学研究』、査読無、57号、2017、57-129

永富青地「關於『破邪集』在中日两国刊印及其背景的考察」、『跨区域与跨文化的接遇』国際学術研究会会議論文集、査読有、1巻、2016、1-9

永富青地「佐藤一斎是否一個朱子学者—從『欄外書』中的記載談起」、『歴史文献研究』、査読有、37号、2016、138-147

石井道子・永富青地「『新編天主実録』について『天主実義』との比較において」、『東アジア交渉学の新しい歩み(上)』、査読有、1巻、2016、25-30

永富青地「『鄒守益集』未収詩輯佚(三) 内閣文庫蔵『鄒東廓先生詩集』より」、『人文社会科学研究』、査読無、56号、2016、59-110

永富青地「陽明後学の講学活動と日常 鄒守益の詩文より見たる」、『「心見/身心」と環境の哲学 東アジアの伝統思想を媒介に考える』(汲古書院)、査読有、2016、67-84

永富青地「佐藤一斎は朱子学者か 『欄外書』の記載より見たる」、『東亜朱子学国際学術検討会 日韓朱子学的伝承と創新』、招待論文(査読無)、1巻、2015、381-390

永富青地「日本における陽明学研究の回顧-江戸期より二十世紀まで」、『日中学術交流的現状と展望』招待論文(査読無)1巻、2015、108-119

永富青地「白鹿洞本『伝習録』について」、『陽明学』、招待論文(査読無)、25号、2015、15-48

永富青地「『鄒守益集』未収詩輯佚(二) 内閣文庫蔵『鄒東廓先生詩集』より」、『人文社会科学研究』、査読無、55号、2015、105-137

永富青地「王陽明の生涯と思想」、『学校』(史跡足利学校研究紀要)、招待論文(査読無)、13号、2015、251-283

永富青地「内閣文庫蔵『鄒東廓先生詩集』について」、『汲古』、査読有、66号、2014、1-6

[学会発表](計8件)

永富青地「關於『破邪集』在中日两国刊印及其背景的考察」、『跨区域与跨文化的接遇』国際学術研究会、2016年12月、台北(台湾)

石井道子・永富青地「『新編天主実録』考 与『天主実義』比較の視角」、『相遇与互鑑:利瑪竇与中西文化交流国際学術研究会』、2016年11月、北京(中国)

永富青地「『聖蹟図』在日本江戸時代の出版と伝播」、『経学之源流と創新 從歴史性と地域性視野』国際会議、2016年8月、ソウル(韓国)

石井道子・永富青地「『新編天主実録』について『天主実義』との比較において」、『東アジア文化交渉学会第八回国際シンポジウム』、2016年5月、関西大学(大阪府吹田市)

永富青地「佐藤一斎是否一個朱子学者—從『欄外書』中的記載談起」、『東亜朱子学国際学術会議』、2015年12月、上海(中国)

永富青地「日本における陽明学研究の回顧-江戸期より二十世紀まで」、『清華大学・早稲田大学第一屆国際学術研討会』、2015年10月、北京(中国)

永富青地「明代書院の出版 以湛若水著作為例」、『理学与嶺南社会文化』国際学術研討会、2014年10月、広州(中国)

永富青地「明代における白鹿洞書院の出版について」、『東亜文化交渉学会第六屆国際学術大会』、2014年5月、上海(中国)

[図書](計1件)

永富青地(編訳) 勉誠出版、『中国書籍史のパーспекティブ 出版・流通への新しいアプローチ』2015、359

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

永富 青地 (NAGATOMI, Seiji)  
早稲田大学・理工学術院・教授  
研究者番号: 50329116